

## 「仮想将来人」を用いた政策手法の可能性

ぶぎん地域経済研究所 専務取締役／チーフエコノミスト 土田 浩

年末年始は、テレビ番組、新聞・雑誌記事などで、将来を展望した特集が目白押しである。今年も、2020年の国際情勢や経済・市場の展望もさることながら、10年とか50年といったタイムスパンで、日本全体や世界・地球規模の課題に向き合った力作が印象に残った。

日本の少子高齢化・人口減少、財政赤字拡大、地方の衰退、国際秩序の混迷、地球温暖化問題、デジタル資本主義の負の側面などなど、問題の深刻さを知るほどに、足がすくんでしまいそうになる。

これまでこのコラムでも何度か触れている通り、現在の経済・社会の閉塞感の元凶は、一言で言えば“将来不安”である。人は、将来への不安が高まり、もっと将来に備えなければいけないと考えたとき、将来の「可能性への欲望」が現時点の「モノへの欲望」を上回り、おカネを際限なく貯めることが自己目的化する。その結果、足もとの経済にデフレ圧力がかかるのである。

しかしながら、将来の問題が難しいのは、長期的に人々の利益になることと、短期的に人々が求めることとが、二律相反の様相を呈するからである。とくに近年、世界の主要国の多くで、ポピュリズム（大衆迎合主義）が台頭し、政治家は選挙に勝つこと自体が目的であり正義であるかのような風潮が高まっている。世論もそれを是認し、世の中はますます浮世の繁栄に傾いているように感じられる。

頃、そんな重苦しさを抱いていたところ、先般、“フューチャー・デザイン”という斬新な政策手法に出合い、一筋の光を見出した。そのキーワードは、「仮想将来人」である。ロールプレイングで仮想将来人となった人は、将来世代になりきって、未来の状況から振り返って、現在の正しい政策のあり方を議論するのである。

そんなやり方に本当に意味があるのかと、疑問を

持つ方も多いだろう。だが既に、成果に結びついた事例もある。岩手県矢巾町では、水道事業のあり方を巡って、住民が「現在世代グループ」と「将来世代グループ」に分かれて検討し、議論を戦わせた。その結果、両グループとも今後の更新投資の重要性を認識し、住民の意向に沿って水道料金の値上げが実施された。

こうした取り組みは、全国の幾つかの自治体で進行中である。問題を自分事として捉え易い、比較的小規模のコミュニティに馴染む手法と言えるだろう。住民、関係者の真剣で精力的な努力に敬意を表するとともに、草の根的なムーブメントとして日本中に広まっていくことを期待したい。

さらに一步進めて言えば、こうした手法は、一企業の内部でも有効ではないだろうか？ その際の「将来世代グループ」は、仮想のロールプレイングではなく、実際に10年後、20年後に経営を担う現役中堅社員世代が、自分事として考える。議論に必要な内部情報や過去の経緯などは、現役経営陣が極力全てを提供して協力する。

この取り組みの主眼は、将来世代に主体的な自覚を持たせることなのかも知れない。だが、同時に、バック・トゥー・ザ・フューチャーの体験を経て、現在の実際の経営判断に活かせる貴重な提言も、数多く生まれてくるような気がしてならない。

最後に、今年の年初のテレビ番組から、強く印象に残った言葉を2つ。

「まだ見ぬ世代が幸せな暮らしを送れるようにすることは、私たちに大きな利益をもたらします。」

ジャック・アタリ氏（フランスの経済学者、思想家、政治顧問）

「自由を守るには、自由放任主義との訣別が必要なのです。」

岩井克人氏（経済学者、「貨幣論」などで著名）